

公益の風

2023年11月

東北公益文科大学 理事長補佐

鈴木 孝純

長い間、日本の大学は高度な専門的学術研究をするところというイメージが濃く、「まちづくり・地域づくり」といった公共的役割には関心を示すケースが少なかったように思います。このような雰囲気の中の2001年4月、持続可能な地域社会を整備し、まちや地域全体、そして何よりも住民全体の暮らしをより良くすることこそ最大課題であるとして、公設民営方式で開学したのが東北公益文科大学です。大学施設は地域・住民への開放を前提に設計・建設され、キャンパス内の四方には門も塀もなく、開学当初から地域との連携、相互貢献を旗幟として掲げてきました。

ところが、私にとって特にここで思い出される

公益大学よ、地域とともに「大きく育て」!

のは、ドイツ・バーデン・ヴュルテンベルク州にある「大学街」として有名なテュービンゲンです。この地を8回ほど訪れましたが、中世の美しい歴史的建物が多く保存されており、豊かな自然の中にある文化と歴史の芳醇を感じさせてくれました。街にあるテュービンゲン大学は1477年の創設で、ヘルダーリン(詩人)、メトリケ(詩人)、ヘーゲル(哲学)、シェリング(哲学)、ケプラー(天文学)を輩出するなど、今でも人文科学および社会科学において伝統的な実績を誇っています。また、1863年にはドイツで初めての理学部が設置され、自然科学や生命科学の分野でも確固たる地歩を築き、これまでに11人ノーベル賞受賞者も十数名を数えます。街の人口は約9万人で、うち約3万人は学生です。街のいたる所に大学のシンボルマークである「椰子の木」の紋章を掲げた教室や研究室があり、肉屋の2階が教室だったり、文房具店の上階が心理学の研究室だったり、古城の中も大学の考古学研究室や博物館として使用されるなど、街を歩けば至る所で大学施設に出くわします。また、街の中を流れているネッカー川の観光渡し舟の営業権

益は、何と学生連盟です。公園や川筋のベンチなどにはテキストを広げて勉強する学生の姿が見受けられ、街全体が大学のキャンパスなのです。「大学街」として注目される所以は、街の人口に占める大学生の多さではなく、数百年にわたって大学と街が自然な姿で互いに溶け込み合いながら共生・共存しているからなのです。

かつて、公益大学の開学を半年先に控えた2000年9月、当時酒田商工会議所会頭で公益大学設立準備委員の新田嘉一氏(現公益大学理事長)が酒田市広報局「マイタウンズ キャンパス」に記した巻頭言「自立と共生が「公益」を促す」に次のような一文の1節があります。

「今私がかつても強く

感じていることは、地域も人々も、これほど自立する意欲に乏しく、しかも共生する心も欠いてしまった時代は、これまで無かったと思います。もたれ合いや依存心は、経済をも衰退させます。利益という目的があっても、一人ひとりが、社会を築き地域をおこす主体であるとの意識を持つことが必要です」。

新田氏の言葉には、大学開学の喜びに浮かれずに、疲弊する地域を活性化するためにも、地域と大学が連携・協働することによって双方が変革や再生を行いながら、共同体としての「大学まちづくり」に邁進していかなければならないという、前述のテュービンゲンの共生・共存にも似た時代を見越した強い決意が表れていると思います。



開学の年の3月24日、校舎横では「大きく育て」の願いのもと、500人を超える市民などによって苗木約4000本が植樹された



東北公益文科大学 教授

温井 亨

近年私が関わっている都市史について、全国の動向、酒田の状況、そしてさまざまな私の成果について述べてみよう。全国の動きを説明するには2014年に設立された都市史学会から始めるのが良いだろう。都市史を研究するには学際的な取り組みが必要であり、都市史学会はそのような組織として立ち上がったからである。しかしより注目したいのは、学会になる前の都市史研究会である。後述する酒田の状況に似たものを感じるからだ。この研究会は文献史（日本近世史）／文学部と建築史（その中の都市研究／工学部）の研究者がテーマを決めて、毎月、あるいは年に数回、自分の研究成果を発

都市史研究の現在：これからは地域の繋がりが主役に

表し合う勉強会であったようだ。テーマの一つに「遊郭とその周辺」がある。濠で囲われた遊郭街は小さな都市、都市の似姿だから恰好のテーマであり、また文献と建築、都市空間の双方から見ないと全体像は見えてこない。さて、都市史研究会と現在の酒田の状況に似たものを感じると言ったが、それは2022年に飽海地域史研究会が立ち上がったことによる。類似点と相違点を見てみよう。まず似ていると思うのは、あるテーマで講師が発表する点だが、都市史研究会が互いに発表し合うのに対し、飽海地域史研究会では講演を市民が聴講しているのが違う。ただ、これまでの郷土史研究会が好事家の集まりという性格が強かったのに対し、史料批判し、既往研究を踏まえて、新たに明らかになった点を明示する等、研究としてのレベルを保ち、それを市民に広げようとしている。また会員も、都市史研究会が史学、建築学を専門とする大学教員と大学院生であるのに対し、飽海地域史研究会は代表の小野寺雅昭さんも大学で歴史を専攻した専門家ではあるものの、大学に籍はない在野の研究者である。さて、これを中央

に対して地方が劣ると考えるかと言えは違つと思つ。というのは、都市史研究の成果は京都、大坂、江戸の三都に偏り、研究者も首都圏、関西に集中して、今後地方をどう研究するかが課題となっているからである。大学はないが古文書は多数あり、その過半が読まれていない酒田のような地方では、飽海地域史研究会の試みは最先端の意味を持つ。ただ、都市史研究では町絵図などを使った研究が柱の一つだが、酒田では都市史の第一人者であった宮本雅明が全国の湊町を調べるなかで行った研究を除けば他にないように思われる。自分のことを書こう。今年、建築学会で、水帳（検地帳、土地台帳であり課税台帳）と水帳絵図を使った敷地の変遷を追う研究を発表した。酒田の町絵図を使った研究の第一歩だと思つたのだが、文字を読むことが必要になる。敷地の間口、奥行の寸法と所有者の名前を読むだけなのだが、小野寺さんが教える古文書

勉強会に参加しているのが役立った。その他にも小野寺さんとは、一緒に酒田の町絵図を系統的に史料批判し検討する作業を始めたところである。さて、私はこうした連携に意味があるのではないかと思つたので、さらに2つほど付け加えよう。飽海地域史研究会の監事には酒田の経済人の西村修さんがいて、壊されそうな町家を次々に買っている。また先日行った遊佐の庭を写真測量する試みには、ドローンの撮影に公益大の広瀬教授、私と小野寺さんに加え、休日業務外にもかかわらず遊佐町文化財課の友野毅さんも参加した。このように地方では、行政も近く、保存再生の実践活動も連続している。こうした所に、東京などになり可能性を感じるのである。



給人町絵図（今回、水帳絵図であることを明らかにした。「酒田市立光丘文庫所蔵」）



東北公益文科大学大学院 公益学研究科 修士生

加藤 真由美

「生きているといういろいろなことがある」。歳を取ればなるほどそう感じるようになる。そんな紆余曲折の人生の中でしばしば現れる、立ち止まって深めたい「ある考え」を持つ人に、人生に研究という学びを加えてみたい人に、また「地域」のことをもっと俯瞰して考えたい人に、東北公益文科大学大学院の入学を強く勧めたい。公益大学院にはそれらの「動機」を満たし、そしてそれを超える学びの体験を得られる日々が待っている。

地方にいなからユニークで面倒見の良い大学院に
通える幸運

私は以前から「人の適性に合った学び方」（教育心理学）に強く興味関心があった。そのような

大学院入学ノススメ

思いの中、自分自身を一度、どうしても学ばなければならぬ環境に縛り付け、そのテーマをしっかりと深めてみたいと決意し、それまで全く関心のなかった公益大学院に53歳で入学した。公益大学院には当時、私の目指す学問分野の専門教員はいなかったのだが「自分の関心を深く掘るにはどうしたら良いか」「どういった形にすれば研究といえるのか」を指導してくださる先生方に出会い、そのおかげで研究を進めることができた。修士論文（『自己調整学習支援プログラム作成の試み』）にまとめ上げられたのは大変幸運であった。しかし大学院での生活で得られたものはそれに留まらなかった。

まずは毎回の講義の中にある「知の波」に圧倒された。学生の力量を見ながら、対話型授業をあたたく進めてくださり、自分の人生では触れてこなかった内容の「現代の知見」が大きく広がっていく。私の頭の中がどんどんブツブツとアップされていった。学友はそれまでの自分の人間関係を大きく飛び越えて、様々な年齢や職層から入学してきており、そんな方達と共に学ぶことも自分の視野を広げたと思う。大学院生という肩

書を持って、外（学会・研究会、関連するイベント・企画等）に出かければ、そこでまた新たな人脈や新たな興味が手に入る。多くの人との出会いや機会を通して、さらに全方向に私の学びの世界は広がり続ける。それらの経験は、跳ね返って自分の新たな面を知ることにもつながり、自己覚知の海を深く潜っていくような感覚すら覚えた。大学院入学後、私はずいぶん生きやすくなった。

まさかこんなところに、こんな世界を展開できる場所があるなんて。クロセットの扉を開いたら、その向こうに別世界が存在していたかのような気がした。

安心して門を叩ける

東北公益文科大学は、実は教育充実度の評価が高い。特に大学院は社会人学生にとって通いやすい環境が整っている。夜間や土曜日の授業、24時間利用可能な研究スペース、図書館に蔵書リクエストができるなど、快適に研究できる制度が多数ある。入学決断をする前に事務室を通じて大学院教員と面談することも可能で、自分の思い描く院生生活

を送ることができるのか、相談に乗ってもらえることもできる。

修士課程を修了した私は現在、公益大酒田キャンパスで自分の研究内容を活かした形で、学部生の学習支援を行っている。また鶴岡キャンパスの大学院では、地域共創事業を補助する仕事をしている。大学院入学前は想像すらできなかった展開だ。

いろいろなことがあるのが人生で、その人生が「巡り合わせ」で作られるのだとしたら...。この大学院が庄内のこの地にある巡り合わせを自ら活かし、ほんの一步踏み込んでみるのはどうだろう。すぐ近くにあるこの場所を、もっと利用しないもったいない。

ほんの少しの勇気を粘りを持って踏み出すことが、次の大きな展開を招く。これも私が大学院で学んだことのひとつである。東北公益文科大学大学院入学を心からオススメしたい。



「公益学総論」の授業
履修者と教員によるフェイスカッション

公益の風

2024年2月



東北公益文科大学 教授

呉 尚浩

全国初の「公益学」立ち上げを掲げる東北公益文科大学の開学に共鳴し、2001年に庄内の地に赴任した。以来、地域の方々、学生や教職員と共に、公益をデザインし実現するべく、実践・教育・研究を積み重ねてきた。特に、自然の循環的な利用と保全のために結集した力を、より多様な地域づくりのエネルギーに転換させて、飛島の島づくり、海ごみ問題、海岸林保全などをテーマに「自分たちの自然・地域は自分たちで守り・創る」という内発的地域づくりを目指している。

公益を理解するためには、反対概念の「私益」や「公害」との対比が有用である。悪く意味での「私益」とは、自分(達)の利益のみを追求することである。「私益」が過度に追求された場合に「公害」が発生する。それは

地域における「公益社会のデザインと実践」を全国に発信する

自分達以外の「他者」への配慮が欠けた行動から生まれる。言いかえれば、他者(人々、自然環境)とのつながりを失った状態、他者の存在を無視・軽視した状態から生み出される。したがって、公益とは「他者の存在を尊重し、他者への思いやり」と「他者とのつながり・調和」を大切にすべし、それにもとづく思考と行動」であり、まさに「公益は愛なり」といえる。私は大学教育の中で、公益を求める「心」のあり方、実現する具体的な「方法」論と「行動」力の三つをバランスよく、実践的に学ぶことを心がけている。

学生にわかりやすく説明するために、飛島の西海岸に膨大なごみが堆積していた写真と、長年の努力の結果、毎年の回収直後には裸足で歩けるかのような姿にまで回復した写真を見せる。前者は、生き物たちにとっては生命やすみかが奪われ、島民にとっては漁業、観光客にとっては景観の妨げとなり、まさに公害といえる。後者は、自然本来の姿であり、誰にとっても好ましい公益的な状況である。非公益的な状況の発生原因を解明し、解決を採り、実現することが公益学の目標である。その達成にはボランティアのみならず、法制度の

改革や国際社会の協力が必要である。目の前の一つのごみを拾うことから、国・国際レベルの経済社会の問題へと学生の眼差しを広げていく。

公益実現のプロセス中でも、私が重要視するのは、多様な主体が「共に考え・ビジョンをつくり・実践する場」の創出である。飛島では「どびしま未来協議会」「海ごみでは「山形県海岸漂着物対策推進協議会」「美しいやまがたの海プラットフォーム」、海岸林では「出羽庄内公益の森づくりを考える会」といった関係者の協議会やネットワーク、大学内では地域共創センター」の立ち上げや運営、計画づくりとその推進体制づくりに関わってきた。

この場が地域内に限られると解決策の限界やマシネリ化が生じる。そのため、離島振興では飛島・粟島・佐渡島の三島交流会を仕掛けることで島民の内発力を高め、トビシマカンゾウ保全や若者の後任促進につなげたり、海ごみ問題では全国の関係者が集う「海ごみサミット」に飛島から発信するなど、2009年の海岸漂着物処理推進法制定に寄与することができた。最近では、昨年10月に日本海岸林学会・酒田大

会を公益天で開催、庄内の関係者と現地検討会やシンポジウムを共催し、海岸林の未来を共に考える場を全国の専門家に広げる好機となった。海岸林の津波被災機能の重要性や、庄内で松くい虫被害が再拡大する中で、全国的にも技術・コスト的に海岸林をクロマツのみで守ることの難しい現状と広葉樹を活かした多様な森づくりの必要性を再認識した。

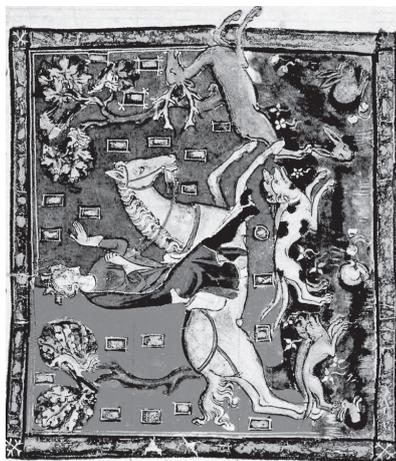
この25年ほどの間に、各分野で庄内での取り組みは一定の成果を挙げ全国モデルとなった。今後海ごみ問題では処理推進から発生抑制へ、海岸林では針広混交林や広葉樹林へ適正に誘導する管理など、より根本的な解決に向けたアクションを取る必要がある。この試みが成功すれば、庄内は他地域のモデルとなり続けることができるだろう。まさに、地域の人々の意識の根底を変える岐路に立たされており、新たな公益の風が吹いていることに期待したい。



写真は、日本海岸林学会・酒田大会における現地検討会(万里の松原)の集合写真(学生会・公益の森づくりを考える会のメンバー、公益大・山形大の学生たちと、2023年10月28日)



私は公益大の開学時から縁あって鶴岡市に住み、退職後の現在も学部と大学院、それに酒田看護専門学校で非常勤講師として教壇に立っている。専門はイギリス中世史で、連合王国イギリスの一角を構成するイングランドの中世史を「森」という視点から眺めてきた。森は食料や木材の重要な供給源であり、王にとっては鹿狩りという最



鹿狩りをすするジョン王

森の中世イングランドと植物

大の娯楽の場でもあった。「大憲章」(マグナ・カルタ)で知られるジョン王も鹿狩りを好んだ。実はこの有名な歴史文書も森とおおにん関係している。「大憲章」は「小憲章」ともいえる森の文書あつてこそものなのである。

こうしたことも含め、長年中世イングランドにおける森と人間のかかわりについて調べてきたが、振り返ってみれば、深遠な研究の森に足を踏み入れる前に、入口のあたりでうろちうろち終わってしまった感じが強い。それでも、樺山紘一編「世界史の鏡」シリーズに小書を加えていただいたことは身に余る光栄であった。ちなみに、樺山紘一の恩師・堀米庸三は河北町谷地が生んだドイツ中世史の大家で、帝大時代、私の恩師・小室榮一の学友であった。

一昨年、ある事典の企画で中世ヨーロッパの「森」に関する項目執筆の依頼があった。その中に「炭焼き」についても入れてほしいという要望があつたので、何冊かの文献にあたってみたが、そのうちの二冊がテオプラストスの『植物誌』であつた。テオプラストスは哲学者アリストテレスの弟子で、「植物学の祖」と称される人物である。本書を読み返しながら

その博識ぶりにあらためて舌を巻いたと同時に、祖父といつしよに山に入り、かたわらで炭焼きを手伝つた子供の頃の記憶がよみがえつてきた。私の森への関心は、生まれ育つた宮城県北東部の純農村地帯で育まれた。

テオプラストスは哲学者にして植物学者でもあつたが、哲学と植物という一見無関係に思える両者も意外なところで結びついている。たとえば、イギリスの哲学者ジョン・ロックは、経験論を論じる際にパイナップルを引き合いに出している。よりよつて、一体なぜパイナップルなのか。この疑問に答えるには、ロックの時代、熱帯産のパイナップルがきわめて希少で、イギリス国内では自家栽培がかなわなかつたという事情を考慮する必要がある。

当然のことながら、そうしたパイナップルは垂涎的で、どんな言葉尽くして説明されたところで、実際に食べてみなければその本当の味はわからないし、パイナップルの実体もつかめないとロックはいふ。自説に説得力をもたせるためにパイナップルという希少で甘美な異国の植物をもつてきているところがミソである。

異国の植物といえば、羽黒の松ヶ岡開墾記念館

を訪れ、前庭に咲くダリアに魅せられたのはいつのことだつたらうか。ダリアの原産地はメキシコや中米で、スペインに持ち込まれ、そこからヨーロッパ各地に広まつた。日本への渡来は江戸末期で、明治末期から大正時代にかけ普及し、大正初期にはダリア熱も高まつた。黒田清輝の名品『ダリア』はそうした当時のダリア・ブームのなかで生まれた。

バラという西洋の花のイメージがつきまとうが、実際には北半球の広い範囲に分布し、日本にも十指に余る野生バラが自生する。こうした日本のバラは、中国原産のバラとともにヨーロッパに渡り、モダンローズの誕生に大きく貢献したのである。歴史のなかの植物。私が関心をよせているもう一つのテーマである。

公益大鶴岡キャンパス 市民向け講座

なぜ薔薇は愛されるのか
～西洋のバラ・庄内のばら～

2024年 3月20日 (水・祝) 午後1時30分～午後3時45分



横山 夢月

東北公益文科大学大学院 公益学研究科 修士
酒田市職員 (スクールソーシャルワーカー)

私はこの春に東北公益文科大学大学院修士課程を修了し、福祉専門職として酒田市内に入庁した。

日本では不登校児童・生徒が年々増加している。文部科学省の調査によると、2022年には299,048人が不登校となっている。不登校児童数が10年連続で増加、55.4%の不登校児童生徒が90日以上欠席しているなど、喫緊の社会的課題となっている。また、同調査では、小学生・中学生ともに不登校の要因として「無気力・不安」が最も多いことが明らかになっている。

そうした中、政府は2023年4月に子ども基本法を施行し、学校や社会に対する不安を抱え

「不登校児童生徒の居場所づくり」

る子どもに対して、政府や自治体、社会全体によることも支援、子どもの居場所づくりなどの新たな取り組みを期待している。酒田市でも、市が運営するふれあい教室や民間が運営するフリースペースが展開されており、子どもが安心できる環境づくりが整備されつつある。なかには学校内に居場所を設けている小中学校も存在しており、学校現場では、学生ボランティアや地域住民による生徒とのあたたかな交流が望まれている。

【不登校と居場所に関する研究に取り組んだ】

私は、大学4年生の時に不登校の子どもたちと関わるボランティアサークルを立ち上げた。酒田市の中学校内に設置されている居場所に大学生が訪問し、中学生と一緒に遊び、給食を食べ、生徒に合わせて自由に過ごす。教員との話し合いをおこない、勉強を教えることや相談にのるなどの具体的な活動内容は設定しなかった。なぜなら、勉強や相談よりも先に、まずは生徒たちが安心して日常生活を送れるような居場所を創り上げることが必要であると考えたためである。安心できる居場所の提供が、不登校の子どもが抱えている不安を解消する鍵となるの

ではないかという問題意識から、大学院での研究に取り組んだ。

【大学院での研究について】

子どもの居場所に関する先行研究として、2023年に内閣府により子どもの居場所に関する調査が実施された。その中では、「広義の「子どもの居場所」の概念整理は行われているものの、身近な地域において各々のニーズに応じた分析や、地方における居場所の拡大に向けた方策の検討が期待されていること

が明らかになった。自身の研究では、地方における子どもの居場所の実施状況に着目し、地方における不登校児童・生徒の視点に基づく子どもの居場所に必要な機能や要素を明らかにすることを目的として、先行研究をもとに仮説を立て

山形県の子どもの居場所の利用者と運営者を対象としたインタビュー調査によりその検証と分析を行った。

その結果、地方における不登校児童・生徒が通う居場所に求められる機能としては、子どもが自分らしく過ごすことができ、周囲との交

流の機会、不登校児童・生徒が抱える悩みや不安に寄り添った支援が挙げられ、調査対象の居場所ではそれらが実施されていることが明らかになった。また、機能を支える構成要素として、不登校児童・生徒が抱える不安を理解したうえで、子どもに寄り添うような親身な関わりや相談対応、子どもの選択を一緒にサポートするような力がスタッフに求められていることが明らかになった。一方で、人材不足、交通手段が少ない、地域の理解に差があるという3つの課題を抽出した。

子どもが求めている居場所を作るためには、地域の多様な大人の理解と、様々な主体の協力による物理的な「居場所」の確保が不可欠であり、その実現に向けて自身も貢献していきたい。



▲院生研究報告会にて

公益の風

2024年6月



東北公益文科大学 教授

青木孝弘

この度「公益の風」に寄稿させて頂くことになり、真っ先に胸をよぎるのは、本学が開学2年目の2003年、厳冬の庄内地方で開催された第34回全国ボランティア研究集会の思い出である。開催テーマ「公益の地から未来の風・出羽庄内」が強烈なインパクトを持っていただけではなく、その後20年間追い風となって私の公益活動と研究とを後押ししてくれたターニングポイントだからでもある。

私の専門は、ビジネスの手法で社会的課題の解決を図る社会起業（ソーシャル・ビジネスとも呼ばれる）で、90年代後半から名古屋やウシントン

公益の風に背中押されて20年、そしてここから新たな風を起こしたい

DCで実践研究を進めてきた。ところが、長井市で酒小売業を営む父親の大怪我によりリターンセざるをえない状況になり、公益の追求をあきらめて家業を継ぐかどうかの決断を迫られるなか、この研究集会に参加したのだった。

そこで私は二つのことに大きな感銘を受けた。一つ目は、公益の多様な価値は固縁こそ見えてくるという実感である。この研究集会が開催された2003年は平成の合併前夜にあたり、庄内地方14市町村全てが会場となつて多様なテーマで分科会が開催された。各地の歴史や文化・自然環境、さらにそこに暮らす人々の気風や気概が色濃く反映され、「公益の地・庄内」の成熟した豊かさを強く印象つけるものだった。大都市では感じることができない公益の潜在的可能性に触れた瞬間だった。

また二つ目は、未来に、そして世界に向けて公益を発信する意義と重要性である。オープニングでは本学初代学長の小松隆二先生、東山昭子さん（当時鶴岡市ウイメンズ・フォーラム代表）、評論家の佐高信さんらが登壇し、21

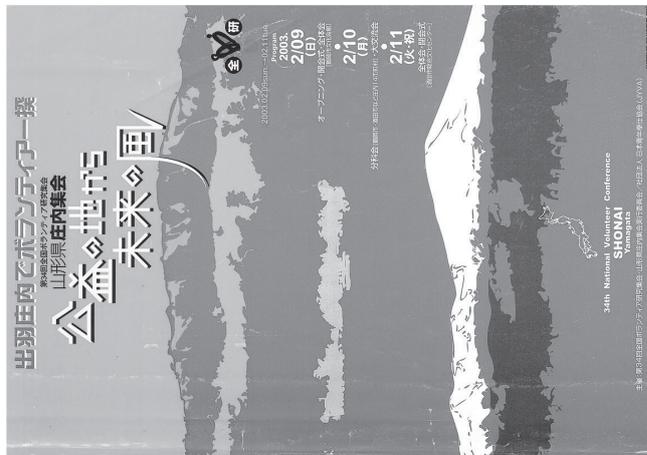
世紀は公益の時代であり、市民ひとりひとりの主体的な活動が地域を支え、世界を変える大きな原動力になること、公益的知見の発信拠点として本学への大きな期待が語られた。

この研究集会で意を決した私は、その後山形県内でのまちづくりや過疎集落支援を本格化させるとともに、2007年度に開設された本学大学院公益学研究科博士課程に進学して社会起業の資金調達に関する研究を深めた。そして山形県の官民協働ファンド「やまがた社会貢献基金」の設立と運営に微力ながら協力させて頂いた。

今春約10年ぶりに庄内に着任した私の抱負を申し上げて拙稿を結びたい。読者の皆様は、休眠預金等活用法をご存じだろうか。10年以上の取引がない、いわゆる休眠預金を資金源にした公益事業への活用が2018年

から開始され、4年間で約260億円が全国1,057カ所の公益事業へと助成されている。この制度は、事業の実効性を高めるために専門家が伴走支援すること、助成期間が最長3年可能であるなどの特徴がある。さらに今年からは、毎年約700億円生じる休眠預金を使った社会的投資も可能になる。しかしながら山形県はこれまでの活用実績が2件に留まり、全国最下位にある。

本学では昨年度、起業（業を起す）研究所を充足させ起業家育成に着手しており、社会起業を支える資金環境の整備の点からも、休眠預金の活用を中心とした社会的投資市場の形成に関する研究を自治体、金融機関、産業界、ソーシャル・セクターと連携して進め、公益の地であるこの庄内から全国、そして世界に向けて新たな風を起こしたいと考えている。



▲第34回全国ボランティア研究集会（2003年2月）パンフレット

公益の風

2024年7月



東北公益文科大学 教授

梅津千恵子

今年4月から新任教員として公益大へ赴任し、タウンを果たした。高校卒業とともに庄内を離れてからずいぶん時が経ったが月山と鳥海山の美しさや庄内の人達の温かさはそのままである。最初に出席した国際交流委員会と公益大がカナダの太平洋岸にあるビクトリア大学と国際交流協定を締結していることを知り、新渡戸稲造とこれで3度出会ったと感じた。

私は1987年に新潟県南魚沼市にある国際大学国際関係学研究所へ入学することになった。1980年に青年海外協力隊員として2年間ケニアの中学校で理数科教師のボランティア活動に従事したのちに、現在の国際協力機構(JICA)

新渡戸稲造に3度出会う

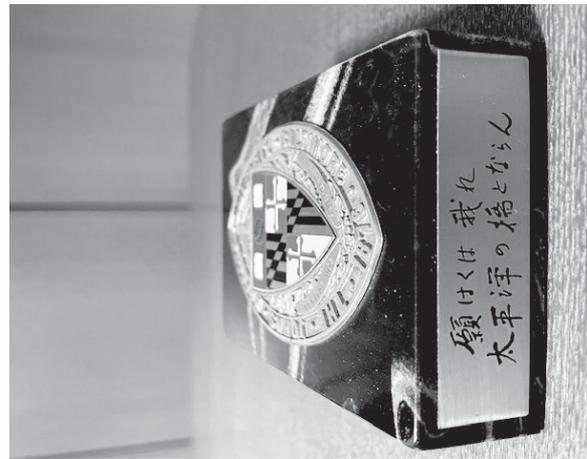
東北支部で途上国から来る技術研修員の研修コーディネーターをしていたが、JICAの会議で後に指導教員となる犬飼一郎先生に会い、国際大学の門を叩いた。学部では生物学を専攻したが、協力隊での活動経験から大学院では途上国の貧困削減を考える開発経済学を志した。在学中にワシントンD.C.にあるジョンスホプキンス大学高等国際問題研究大学院(SAIS)へ1学期の交換留学をする機会を得た時に、日本研究グループ主催の歓迎レセプションで日本からの留学生へ記念品が贈られた。その前面には明治・大正期に活躍し国際連盟事務次長に就任した新渡戸稲造の言葉「願はくは我れ太平洋の橋とならん」が刻まれていた。新渡戸は明治17年(1884)にジョンスホプキンス大学へ留学する。それは彼の入学100周年を記念して作成されたものだった。これが最初の出会である。

国際大学の修士課程を修了した私は幸いにもイーストウエストセニターからの奨学金を得て、そのままハワイ大学の博士課程へと進学した。専攻は農業資源経済学で農業の生産資源の適切な利用のための経済学的評価を学んだ。ハワイ大

学の院生には途上国でボランティア活動をしたアメリカ平和部隊(Peace Corps)経験者が多かったのも心強かった。日本に戻った後は、農業経済学や環境資源経済学という分野が日本においての様に発展してきたのかに興味を持った。その中で、明治32年(1899)に日本で最初に農業経済学博士号を授与されたのが新渡戸稲造であったことを知った。新渡戸はインターネットなどもない時代に世界各地の情報を集約して「農業本論」を著し、また日本における協同組合の設立にも尽力した。これが二度目の出会いである。

冒頭にも述べたが、公益大へ赴任して最初の国際交流委員会でビクトリア大学との学生交流のプログラムがあることを知って大変驚いた。公益大で新渡戸稲造に3度目

の出会いを果たした様な気がした。新渡戸は国際情勢が日増しに緊張を増し日本が戦争へと突入して行く中、民間の国際研究機関である太平洋問題調査会の活動に尽力していたが、昭和8年(1933)にカナダのバンフで開催された第5回太平洋会議で体調を崩し、その2か月後にビクトリアの病院で逝去したのであった。彼は環太平洋地域の緊張関係を相互理解による民間の力で解決することに尽力していたのであったが、公益をグローバルゴモンズとして追究していたのである。大学教育の使命のひとつは地域と外をつないで、ローカルとグローバルの「架け橋」となり広い視野で公益に貢献できる人材を育成することであろう。若い学生の皆さんにはぜひ新渡戸稲造の意志を引き継いでいただきたいと願う。



新渡戸稲造留学100周年を記念してジョンスホプキンス大学が作成したペーパーウェイト



東北公益文科大学 准教授

加藤 良浩

これまで私は英米の文学作品を研究の対象としてきた。中でも、特に興味を持って取り組んできたのは、1920年代以降にアメリカ南部の地域で起こった「南部ルネサンス」と呼ばれる文芸復興の時代に属する小説である。

「南部ルネサンス」の小説を語る際に忘れてはならないのは、南部の産業に壊滅的な被害をもたらした南北戦争である。その戦争において、戦闘のほとんどは南部領地で行われた。このため、南部では道路、鉄道、橋梁等の重要な社会基盤が破壊され、農地は荒地と化した。北軍のシャーマン将軍による徹底した焦土作戦がそれに追い打ちをかけ、南部の人々が持ついたほとんどと言ってよいほど多くの所有財産

「愛」の心で意識の高みへ

は消失し、産業そのものも壊滅状態に陥ってしまった。

こうして甚大な被害をもたらされ、後世にも大きな痕跡を残したことが、戦争は南部ルネサンスの作家たちにも大きな影響を及ぼしたと考えられる。彼らは戦争で物事を失った喪失感を肌で感じたにちがいない。しかしそのとき、彼らの心には、物の二項対立的存在とも言うべき精神が価値ある存在として浮かび上がってきたのではない。か。そして、結果的にはそのことが、南部という枠組みを越えたテーマを描くことに関心を向ける要因となったのではない。か。

ジョージア州サバナに生まれたフランシス・オコナーは、南部ルネサンスの代表的作家の一人だが、晩年の代表作「高く昇つて一点へ」には、精神の存在に重きを置く作者の姿勢が色濃く表れていると言えよう。この作品は、カトリック司祭かつ古生物学者、地質学者であり、北京原人の発見者としても知られる、ティヤール・ド・シャルタンの著作『現象としての人間』にオコナーが感銘を受け、その理念と公民権運動が高まっていた南部の現実との融合を試みたものである。

ティヤールによれば地球上の生命が持続するためには形態変換に迫られたと同様に、ひとたび思考(内省)力を備えるまでに発達した人間は、意識の上昇(自己の鍛錬、発見)という深層における形質転換の持続なくしては存続しない。また人間は、他のすべての生物や文明の形成過程において見られたように、能力を完成し発揮していくためには集団をなす必要があるが、その集団での意識の上昇によって、死のエントロピーからも免れた人間は(ただし肉体は免れることはできない)求心的旋回運動を通して、至上の意識の高み、すなわち至高の平和と救済の究極としてのオメガ点に達することができ

る。ただし、この場合条件がある。生命そのものが構成要素の無限の多様性を通じてしか確立されない以上、その集団は共通の性質を持つ個で構成されていなければならない。つまりは接点を持たない異質な性質の個と個が存在そのままに結び

ついたものだけではない、ということである。それでは、そうした不可能にすると思える結合を可能にするのは何か? それはまさに、自己よりも他を優先するとの意味において公益の概念に通底する愛の力である。この力こそが存在の本質を捉え、個と個を結びつけるのである。

公民権運動において人々は、キング牧師の「汝の敵を愛せよ」という理念のもと非暴力を貫いて権利を勝ち取った。オコナーが『現象としての人間』における理念と南部の現実との融合を試みたのも、この現実の愛の力を感じた彼女が、それを『現象としての人間』の中で述べられる神秘的な力を持つ愛の力と重ねようとしたからにちがいない。



シャーマン将軍による焦土作戦「海への進軍」

公益の風

2024年9月



東北公益文科大学大学院 公益学研究科 修了生
鶴岡市職員

佐藤 祐

今の子どもは未来の大人です。地域の将来を担う若者たちを地域で見守り育て、地域で活躍できるように環境を整えることが、大人の責務であると思います。

若者の自己効力感を高める

私は市職員としての業務の傍ら、東北公益文科大学大学院に在籍しました。そこで自治体が主催する子ども議会・若者議会の調査研究に取り組み、自治体が予算の使い道や提案内容について若者たちに委ね尊重すること「まちづくり」として結果を出すこと以上に「ひとつくり」として考え、「若者に対する差別や偏見」を取り除くことの2つの要素が重要であると考察しました。

例えば、山形県遊佐町では「少年議会」が、愛知県新城市では「若者議会」が行われており、前者では町からあてがわれた予算をもとに政策を実行でき、後者では市に若者

地域で育てる「未来の大人」たち

政策にかかわる予算を提案することができ、どちらの事例でも、行政が予算の使い道や提案内容について若者に委ね尊重すること「まちづくり」として結果を出すこと以上に「ひとつくり」として考え、「最近の若者は…」「若者は大人より未熟だ」といった若者に対する差別や偏見を取り除いて取り組んでいることが共通しています。さらに、少年議会や若者議会に参加した若者が、活動の中で考え方が変わり、地域に貢献したいという思いが強くなったという意見も多くあったのです。

大人が若者に対して差別や偏見がある状態だと、若者は徐々に「大人は自分たちのことを信じてくれない」「自分には何もできない」と考え、大人に対して不信感を募らせていき、まちづくりにかかわる意欲を失っていきます。若者と大人の信頼関係が構築され、若者の提案や提言が形になる経験をすることで、自己効力感や地域への愛着が高まり、地域のまちづくりに対する意欲が高まっていくことが考えられます。

また、私は大学院在籍中に「ファシリテーション」という、会議や話し合いの場で多様な参加者の対話を引き出すことができるスキルを身につけた「地域共創コトナイター」の認定を受け、活動しています。ファシリテーションの考え方に基いた対話の場では、大人も子どもも、年齢や立場などに関係なく、お互いの意見を尊重し合いながら話し合いを進めていきます。地域の様々な話し合いの場に子どもや若者が参加し、

意見を言える環境があることも、自己効力感や地域への愛着が高まる要素になるのではなかと考えています。

大人になっても暮らしたまに

私は現在、鶴岡市役所の若手職員有志で構成する「鶴岡WBCプロジェクト」に参加しています。若者の視点から既存の枠組みにとられない政策提言や立案を行うことが目的です（奇しくも昨年度は

このプロジェクトから「子ども会議」が提案され、事業化されることになりました。大学院で学んできた経験を十分に活かし、若者が大人と同じ立場で意見交換をしたり行政に関わりたりできる、そして大人になっても鶴岡で暮らしたいと思える、安心して暮らすことができるまちの実現に向けて取り組んでいきます。

「(広義の)若者が主体となって参加する会議体」類型モデル表

運営主体	主目的	参加方法	継続性	制度	類型	
自治体主導	地域を知る 交流する	不特定多数の 若者が参加	単発事業	A	子ども会議・若者会議(地域価値発見・交流単発型)	
			継続事業		B	子ども会議・若者会議(地域価値発見・交流継続型)
		不特定多数の 若者が参加	単発事業	C	子ども会議・若者会議(政策提言・まちづくり活動実践単発型)	
			継続事業		D	子ども会議・若者会議(政策提言・まちづくり活動実践継続型)
	行政へ提案する まちづくり活動の実践	行政への参画 まちづくり政策の決定と実行	選挙等で選ばれた 若者が参加	単発事業	E	子ども議会・若者議会(主権者教育単発型)
				継続事業		F
		選挙等で選ばれた 若者が参加	選挙等で選ばれた 若者が参加	単発事業	G	子ども議会・若者議会(主権者教育・行政参画型)
				継続事業		H

筆者作成の「子ども議会・若者議会類型化モデル」。下へ行くほど、若者が行政に参画するレベルが高い。



一期生として公益大、大学院へ進学し修士論文「北西太平洋地域における海洋ごみ問題の現状と課題—ICCの手法を用いた環境教育の有効性をめぐって—」を執筆しました。当時は、今では一般的となっている「マイクロプラスチック」という言葉や「スポGOMI」活動が生まれる前で、海洋ごみが環境や生物へ及ぼす悪影響も一部の人が知る問題でした。そこで私は、環境問題

公益の風

2024年10月

東北公益文科大学大学院 公益学研究科 修了生
鶴岡商工会議所 職員

相田 涼

想像力と創造力を発揮し、緑の下で地域を支援する

は人々の無知によるこ
ろが大きいのではないか
という仮説を立て、海洋
ごみ問題の根本的な解決
策として、環境教育の有
効性を検証する研究を行
いました。そこで着目し
たのが「ICC（国際海
岸クリーンアップ）」と
いう手法です。

ICCは、世界共通の
データカードを使用して
水辺・水中に漂着散乱す
るごみを回収しながら
その品目別個数を計測
し、海洋ごみの問題点を
参加者一人ひとりに気づ
いてもらいながら改善す
るための方策を探る、国
際的な調査・清掃活動で
す。

ICCは現在も世界中
で展開しており、こうし
た活動が続けられた結
果、今では、海洋ごみ問
題は「五大環境問題」の
一つとして認知され、削
減に向けた取組みが各国
で行われています。

私は現在、鶴岡商工会
議所で会員事業所の経営
支援や地域経済の活性化
に資する仕事に携わって
います。「環境」と「経済」
は一見関連性が低いよう
にも思われますが、その
重なりを考えることが問
題解決につながることに
あります。大学院での研
究活動を通して培った思
考スキルは、私の現在の
仕事において大きな役割
を果たしています。

企業の経営課題を分析

し、解決策を提案する際
には、問題の本質を的確
に捉え、論理的に思考す
るスキルが不可欠です。
また、企業経営者とのコ
ミュニケーションを円滑
に進めるために、相手の
立場に立つて考えるスキ
ルや、分かりやすく説明
するスキルも必要です。

新規事業の立ち上げや
事業拡大のための計画策
定を支援する際には、市
場調査や競合分析などを
通じて情報収集を行い、
分析するスキルが求めら
れます。また、計画を具
体的に実行に移せるよう
う、スケジュール管理や
リスク管理なども行う必
要があります。

市民が参加できるイベ
ントを企画運営する際に
は、企画段階から実行段
階まで、様々な課題を解
決しなければなりません。
そのため、問題解決
力、論理的思考力、
コミュニケーション
力、情報収集力
など、様々な能力
を駆使する必要があります。
これら
のスキルは何れも
大学院での研究活
動を通して習得し
たスキルだと考え
ています。

近年、私は鶴岡
サイエンスパーク
を広く市民に知っ
てもらったためイ
ベント「鶴岡サイ
エンスパークまつ

り」の企画運営に携わっ
ています。2023年に
初開催した「鶴岡サイエ
ンスパークまつり」は、
関係各所との綿密な準備
の甲斐あり大変多くの
方々から来場いただき、
サイエンスパークについ
ての市民理解向上に貢献
することができました。
実現までは大変な困難が
ありましたが、これまで
培ってきた「想像力」と
「創造力」を発揮できた
成果だと感じています。
今後も大学院や仕事で
培ったスキルを活かし、
縁の下の方たちとして地
域経済の発展に貢献しま
す。

今年の「鶴岡サイエ
ンスパークまつり」は11月
2日（土）に開催しま
す。昨年にも増して魅力
的なイベントになります
ので、皆さまのご来場お
待ちしています。

1 見たい 知りたい パイオな未来!!

鶴岡サイエンスパーク
まつり 2024

2024年11月2日(土) 開催
<https://tsuruoka-sp-fes.jp/>



公益の風

2024年11月



東北公益文科大学 准教授

広崎 心

私は大学を卒業後、長年医薬品業界に携わっていました。その後、アカデミアの道に進み、現在東北公益文科大学経営コースに所属し教員としております。今回、縁があつて100年企業である株式会社本長の前社長（3代目 本間光廣氏）と現社長（4代目 本間光太郎氏）のお二方から多くのことを学ばせていただきました。

「特別セミナーb（庄内地域の課題解決と企業経営／事業承継を考える）」での講演から

本年6・7月に、大学院修士課程科目「特別セミナーb」を本学後援会と連携し、「庄内地域の課題解決と企業経営／事業承継を考える」をテーマに、公開講座とし

2つの視点から100年企業の荘厳さを学ぶ

て開講しました。受講生は大学院生・学部生、社会人の合計16人でした。事業承継とは会社経営のバトンタッチをすることですが、多くは親子間で行われますが、最近では従業員や親族への譲渡、第三者、つまり全く知らない方への譲渡も徐々に増えています。この地域が抱える重要な課題を設定したことから、様々な職種の方が参加され、地元の名著名経営者様や金融機関の専門部門の方に登壇いただき、大盛況にて終わることができました。

登壇者の皆様から事業承継の具体事例や課題についてお話をお聞かせいただきましたが、なかでも100年企業である鶴岡市大山の老舗漬物企業・本長の3代目社長の講演には感銘を受けました。私の専門分野であるマーケティングでは、今をひたすら追いかける傾向があります。一方、本長の会社概要には、「庄内の自然の恵みを生かし、皆様の豊かな食文化の創造を貢献します」を社是に「創業以来かわらぬ製法で漬物造りを続けてまいりました」と記されています。3代目社長の講演は、真つずぐ伸びる100年杉のような荘厳さや美直さ、ふれない強さを肌で感じられる内容でした。

新商品開発プロジェクトから

そして、偶然にも同じタイミングで、4代目社長のご厚意にて、学部ゼミの学生とともに新商品開発プロジェクトに参画する機会をいただきました。プロジェクトでは、4代目社長と私は必ずしも意見が一致するわけはありません。私自身、企業ではマーケティングや商品開発、事業開発といった仕事をして参りました。事業開発とは他社と交渉して、製造権や販売権を売買する仕事です。買収の際には、利益計算はもちろんプロジェクト全体を管理しなければなりません。そのため、絶えず原価率や投資回収期間を意識する習慣がついており、ついつい製造原価を下げることを考えがちです。一方、100年企業の4代目社長はいつもどっしり構え、優良食材をふんだんに使った商品提供を重視されます。確かに、私が考えた方が利益は増えるかもしれませんが、しか

し、それは100年企業の信頼感と合致するものではありません。4代目社長からは多くのことを学ばせていただき心から感謝しています。また、公開講座に登壇された金融機関の方によると、100年企業の出現率は、山形県は京都府に次いで全国2位とのこと。本長の3代目・4代目のような懐の広い経営者を輩出する土壌だからこそ、100年企業が育つのかも知れません。

さて、本長と公益大によるコラボ新商品ですが、国産の生姜をふんだんに盛り込んだ香り高い素材型商品です。モニターをした学生やその他家族曰く、「豆腐、焼きおにぎり、炊き込みご飯、唐揚げ、焼きなすなど多くの食材を引き立てる逸品とのこと。庄内地域のスーパーや物産館などで見かけたら、是非ともお試しいただけます」と幸いです。

（商品名／漬物屋本気の味噌生姜タレ 発売予定日／11月14日）



漬物屋本気の味噌生姜タレ



東北公益文科大学 教授

山本裕樹

令和6年11月現在、NHKで放送中の「チ。地球の運動について」は魚豊が描いた漫画が原作のアニメで、15世紀のポランド王国（ポーランド王国）がモデルで地動説を研究する人々がキリスト教がモデルによって迫害を受けるというフィクションである。私は「インターネット望遠鏡」を用いた天文教育の研究を行っている。いい機会なので中世ヨーロッパの地動説について少し触れておきたい。

古代ギリシアの時代から太陽や惑星の運動について天動説と地動説が存在した。天動説（地球中心説）は、地球が宇宙の中心にあって動かず、太陽やその他の惑星は地球の周りを回っている

「天とチ。」と

るといふ説である。聖書には、地球を中心に太陽が動いていると解釈できる記述があり、中世ヨーロッパでは天動説が広く信じられていた。それに対し、地動説（太陽中心説）は、太陽が宇宙の中心にあり、地球や他の惑星は太陽の周りを自転しながら回っているという説である。地動説の方が太陽系をより正確に説明しているといえるが、現代の天文学では、そもそも宇宙には中心が存在しないと考えられている。

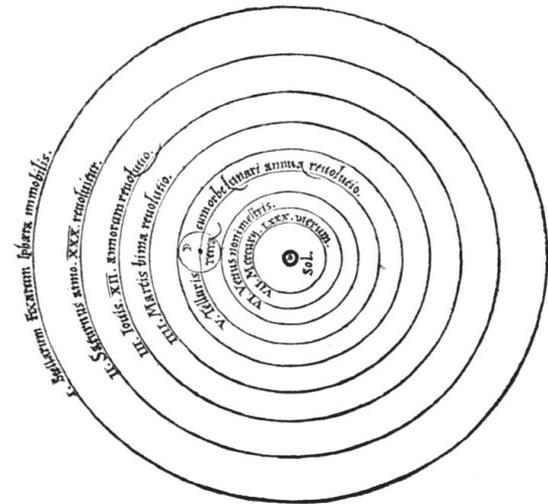
地球から惑星を観測すると、月日が経つにつれて惑星は星座の中を一定方向に進む（順行）。ところが、徐々に見かけ上の速度が遅くなったり、ついには逆方向に進みはじめる（逆行）。そしてまた順行に戻るという運動を繰り返す。古代ローマのアトレイオスは天動説に「周転円」「エカント」などの人為的な仕組みを加えることで逆行を説明した。その後、観測精度が上がってくるとアトレイオスの理論でも不十分だといことが分かってきた。

15〜16世紀のポランド王国で地動説といえはニコラウス・コペルニクスが有名である。彼は聖職者になるためにポランドのクラクフ大学やイ

タリアのポロニヤ大学に通い、そこで天文学についても学んだ。彼の本業は聖職者であり、天文学は趣味で続けた。彼は地動説によって惑星を統一的に記述して逆行が自然に説明できることに気付いたが、彼の計算では未だ多くの周転円が必要で、アトレイオスの理論より計算が楽になっただけではなかった。コペルニクス自身は彼の理論の証明は難しいと考えており、社会への影響も考えて当初は発表するつもりはなかった。周囲の説得により1543年によりやう著書「天球回転論」を出版したが、それが届いたのは彼が亡くなった当日だった。その後、コペルニクスの地動説はドイツの天文学者ヨハネス・ケプラーが知るとなり、有名な「ケプラーの法則」の発見によって世間に地動説が認

められるようになった。

実際に地動説を唱えて迫害を受けた例はあまりないようだが、「ガリレオ裁判」は有名である。16〜17世紀のイタリアの天文学者ガリレオ・ガリレイは、自作の望遠鏡で木星の周りを4つの衛星が公転していることや金星は満ち欠けしながら見かけの大きさが変化することを発見し、地動説は正しいという確信を持った。この主張のために異端審問にかけられたのがガリレオ裁判である。彼を擁護する人はいたものの、結果として、地動説を放棄するように言われ、死ぬまで軟禁状態となった。のちにローマ教皇がガリレオ裁判は誤りだったと謝罪してガリレオの名譽が回復されたのは、彼の死から350年後の1992年のことだった。



コペルニクス著「天球回転論」に描かれた地動説のモデル

公益の風

2025年 1月



東北公益文科大学 准教授

渡辺 暁雄

「……こゝ、自由に話し合っている場なんですよね?」

大学院での講義「公共性の社会学」の中で、一人の院生がそうつぶやいた。講義では政治学者・斎藤純一の著書『公共性』を輪読している。初学者向けの本ではあるが、精緻かつ伏線が張り巡らされた文章構成、政治学を始め哲学、社会学など数多くの思想が散りばめられている等の理由から、この分野に接する機会が少ない方々には少々ハードルが高いようだ。いきおい講義内でも、用語の説明や文脈の確認に時を費やし、内容を吟味するまでは至らないことが多い。

「現れの空間」としての大学院講義

そんな折、冒頭の発言があり、改めて学びとか講義とか、そうした語々の意味を考え反省した。

『公共性』は、ハンナ・アーレントとユルゲン・ハーバーマスという、20世紀、公共性の概念を進化(深化)させた二人の思想をベースに展開する。「公共的空間」に関して、ハーバーマスは自発的に集う諸個人による討議の空間を「公共圏」と位置づけ、アーレントは、唯一無二の、共役不可能な諸個人がその行為と意見によって、他者に対し現前する「現れの空間」とした。

皮肉なことに、本来個人として互いに「現れるべき自由な学びの空間」も、いつしか講義という「形式」に、あるいは惰性的に続く慣習が「常識」となっていたのかもしれない。

大学院ではもう一つ、「社会調査論」という講義を担当している。ここでは院生がそれぞれ、知りたいこと(課題、謎)を解くための道具、具体的にはアンケートやインタビューの手法を学ぶ。それらは確かに便利な道具ではある。しかし決して効率一辺倒の、冷やかな道具ではない。

アンケートの質問項目や選択肢などを設定していく中で、テーマ認識や

問題意識がより深まり、洗練されていくことがわかる。なにより調査は「人」に対して行われる行為である。この質問のしかたが適切だろうが、理解してもらえたらどうかと、調査対象の身になって考える。アンケートの作成とは、他者との多様なコミュニケーションが行われる作業といえる。

回収された大量の調査票から結果を数値化し、客観的な結論を求め、アンケート調査であっても、その対象となる人々は、異なる意見や価値観を持った、血の通った個人である。

例えば調査票の「回収率」を上げるという作業。回収率が低ければそこから導き出される結論に疑問の余地が出てくることもある。そのため、少しでも回収率を上げようと、そのアンケートの社会的重要性や、調査する側の信頼性の確保、個人情報への適切な

な対応状況などを調査対象に印象付け、答えやすいように質問項目を構成し、さらには「お礼」として粗品(最近のインターネットを用いた調査ではポイントなど)を贈呈する。しかしそうしたテクニックに拘泥するあまり、調査対象となる人々が唯一無二の共役不可能な存在であることを、大量調査であるほどに忘れてはならないと思う。

調査票を通して、私たちは多くの人と対話し、様々な意見を得る、私たちが対象者が互いに現れ合う(会う)。対象者の面前に届けられた調査票が「公共空間」として機能するように、院生がそんな調査を実施できるように、講義の中で配慮していきたい。



理解を深めるため、映画『ハンナ・アーレント』も鑑賞します。



東北公益文科大学 准教授

東江口出郎

本稿はフイリピン以下：比国）ジャーナリストが懸念する比国のウクライナ化を紹介することを目的とする。

比国のジャーナリストのヘルマン・ラウレル（Herman Laurel）は、彼のフェイスブックで2022年3月31日、ロシアのループルがウクライナ戦争での経済制裁にも関わらず価値を戦争以前に戻したのを受けて、ロシアが勝つと宣言し、翌日の4月1日、「比国のウクライナ化」を懸念した。比国のアメリカ支持者がアメリカ（以下：米国）の利益のために米国を支持することで、ウクライナが壊滅していくのと同じことが、比国でも起こると懸念したので

「比国のウクライナ化」を懸念する比国ジャーナリストの見解

ある。彼の主張を要約すると、以下のようになる。比国政府や従米派の研究者、主流派マスコミが、中国の侵略を防ぐには米国の武器を事前に配備すべき、と言っている。植民地主義と新植民地主義によって100年以上も比国を占領し続けてきたのは米国であり、何10万人もの比国人を殺し、搾取し続け、その経済成長を抑圧し続けてきたのも米国である。防衛協力強化協定の更なる強化で比国最北部のカガヤン州に再配備される米国製兵器は、今日ウクライナでロシアによって行われているような、極超音速ミサイル等の兵器による報復を引き寄せる磁石で、ロシアが中国に置き換わるだけである。米国はウクライナ同様、比国人の血が最後の一滴まで流れるまで戦わねばならぬ。流れるその血や命は米国人のものではない。米国は第二次大戦末期、マニラの日本軍との市街戦に直面した時、「東洋の真珠」と謳われたマニラに絨毯爆撃をして破壊した。比国都市部では、25万人の民間人が殺害された。これは日本が殺した数より多い。独立後は、多くの比国人が米国国民のように米国人の命令に従っている。西フィリピン海（南

沙諸島）で起こっている中国の海警や軍と比国軍との間に起こっている事件は、比国の戦略的安全性保障や福祉を犠牲にして、米国下院議会によって承認された5億ドルの新たな反中プロパガンダキャンペーン資金から儲けようとする目くらんだ比国の主流メディアによって故意に大げさに報道されている。比国の有力紙インクワイアラーは、州民を心配し、比米合同軍事演習のバリカタンが死活的に重要な中国の投資家との経済活動に損害を与えることを懸念したカガヤン州知事のマヌエル・マンバのことを「親中派」と位置付けた。バリカタンは、台湾を標的にした演習になっている。米国支持派には明らか

かに良心がない。米国が自国の海岸で敵と正面から対峙するのを妨げ、米

国を救うために、比国に戦争を招き入れようとしている。翻って日本について考えると、ロシアは欧米や日本の経済制裁にも関わらず、今年はGDPが世界で4位となり、今ではウクライナの方が和平を望んでいることは伝えられているが、それ以上の報道はあまり見られない。また、日本にも多くの米軍基地があり、既に比国には米国の中距離弾道ミサイルが配備され、今年には日本にも配備される予定である。日本のメディアは、客観的判断材料を提供する報道を行って欲しい。



第2次大戦時にも使われたサンチャゴ要塞でゼミ生と



東北公益文科大学 講師

渡辺 伸子

本稿では、「大学院で学ぶ」ということについて書きたい。特に「研究を通して身につくこと」について考えたい。これらのことは、私の人生経験の中で、情動的に価値があり、かつ、紙幅に合わせて書くことのできる唯一のトピックである。

まず、大学院について書く。大学院は、修了すると修士号が授与される2年制の「修士課程」と修了すると博士号が授与される3年制の「博士課程」で構成される。前者を「博士前期課程」、後者を「博士後期課程」と呼ぶ大学院もある。いずれにせよ、それぞれの修了には修士論文、博士論文の提出が必要である。

研究を通して身につくこと

一般的に、論文を書くためには、「データ」を「分析」しなければならない。どの分野でもそうだと思う。「データ」にも「分析」にも様々な種類があり、分野によってメジャーな方法はそれぞれであるが、いずれにしても「データ」を「分析」しないと、研究にならない。

「データ」には、理系であれば何かを観測、計測したものが該当するだろう。人文系であれば、「文献」がデータになることがある。社会科学系であれば、アンケート調査がデータとなることが多いが、面接で得られた回答もデータになりうる。

では、「分析」はどうか。データが数値である場合は、統計的にデータを処理する。平均値とか相関係数とか、耳にしたことのある統計用語もあるかもしれない。データが質的な場合は、分類などの手法で処理するが、言語的なデータに関して、近年、計量テキスト分析と呼ばれる、統計ソフトを用いてより客観的にデータを処理する方法が普及してきている。計量テキスト分析は、文献をデータとした場合にも適用することができるため、文学作品を分析することも可能であり、言語的なデータを扱う人文系

分野もその恩恵を受けている。

さて、私の経験に話を移すと、私は簡単なアンケート調査（専門的には質問紙調査法と呼ぶ）とごく簡単な心理学実験ができる。しかし、経値と比較すればほとんど「質問紙調査屋さん」である。また、データの処理に関しては、一般的な統計手法を身につけている。ありがたいことに本学に着任してからセミナーに出る機会を得て計量テキスト分析も身につけることができた。

大学院という「データを深める」ということに目がいきがちである。しかしながら、その後の生活に残るのは、テーマではなく、技法である。データを収集する技法とデータを処理する技法である。

私はいまのところ、研究以外のところでこれらの能力を使う機会がないが、いつか私生活で「全体の意見の集約に苦慮している」という入りが相談に現れたらこれらの

技法を協力したいと思う。町内会の意見集約、顧客理解、イベントの満足度調査などに、質問紙調査法は応用できる。

なお、「質問紙調査法」と呼んではいないものの、いまはほとんどスマートフォンでの回答である。その画面作成も、大学院で経験しておくとい経験のひとつだろう。「使用」のページから習得するよりも、先輩や先生に疑問点を聞きながら進めるほうが絶対スムーズだからだ。

人生は短い。義務的で手のかかることは学術の技法を応用して効率よく終わらせて、もっと創造的なことをしよう。大学院で過ごす時間も創造的だが、大学院で身につけたことを社会に応用していく過程も、なかなか創造的だと思う。

食べ物の味の好みについての調査

あなたは、次の味が好きですか、嫌いですか。
「好き・どちらともいえぬ・嫌い」のいずれかに○をつけて教えてください。

- | | |
|-----------|----------------|
| ① さっぱりした味 | 好き・どちらともいえぬ・嫌い |
| ② こってりした味 | 好き・どちらともいえぬ・嫌い |
| ③ 甘い味 | 好き・どちらともいえぬ・嫌い |
| ④ 辛い味 | 好き・どちらともいえぬ・嫌い |
| ⑤ 濃い味付け | 好き・どちらともいえぬ・嫌い |
| ⑥ 薄い味付け | 好き・どちらともいえぬ・嫌い |

質問紙調査の例

東北公益文科大学大学院 公益学研究科
開設20周年記念

庄内から吹く公益の風

— 庄内日報社『敬天愛人』連載
「公益の風」集成 —

発行 令和七年三月

発行者 東北公益文科大学大学院

印刷 (株) 庄内日報社

この冊子は庄内開発協議会のご支援により
作成されました。